

研究論文

PCAGIP 法の実践における書記の工夫と今後の課題

関西大学大学院心理学研究科心理学専攻 小野真由子

要約

PCAGIP 法は、心理臨床領域のみならず産業領域など、パーソン・センタード・アプローチを基盤としない領域で働く対人援助職にも広がりつつある（並木・小野, 2016）。様々な領域での PCAGIP 法の実践において、最も重要な基盤となっている理念は、クライアントに内在する資源を活かしてよりよい方向への変化を援助する（Rogers, 1951）にあたって“事例ではなく事例提供者を大切に”することである（村山・中田, 2012）。この“事例提供者を大切に”した事例検討会にするため、PCAGIP 法には複数のルールが存在するが、ルール通りに実践すれば PCAGIP 法で事例提供者が、事例を出してよかったと感じられるような体験が生み出されるとは限らない。つまり、PCAGIP 法がうまく行くには、ルール通りに実践するだけでなく、事例提供者の視点からヒントを見出す雰囲気を作り出すための書記やファシリテーターのサポートも大きいと考えられる。

今回は、PCAGIP 法に参加した参加者の感想に基づき、書記の役割を検討したうえで、筆者のこれまで実践の中で書記を担当する際の具体的な工夫についても言語化し、PCAGIP 体験を支える書記の実践例の一つとして紹介したいと思う。最後に今後の PCAGIP 法の研究の課題として、情報を可視化することの有効性や書記の在り方に関して述べた。

キーワード：PCAGIP 法、書記、記録者、PCAGIP 法の効果

1. 背景

PCAGIP 法は、心理臨床領域のみならず産業領域など、パーソン・センタード・アプローチを基盤としない領域で働く対人援助職にも広がりつつある（並木・小野, 2016）。様々な領域での PCAGIP 法の実践において最も重要な基盤となっている理念は、クライアントに内在する資源を活かしてよりよい方向への変化を援助する（Rogers, 1951）にあたって“事例ではなく事例提供者を大切に”することである（村山・中田, 2012）。この“事例提供者を大切に”にした事例検討会にするため、PCAGIP 法には複数のルールが存在するが、ルール通りに実践すれ

ば PCAGIP 法で事例提供者が、事例を出してよかったと感じられるような体験が生み出されるとは限らない。つまり、PCAGIP 法がうまく行くには、ルール通りに実践するだけでなく、事例提供者の視点からヒントを見出す雰囲気を作り出すための書記やファシリテーターのサポートも大きいと考えられる。しかし、現在 PCAGIP 法の実践方法については村山・中田（2012）で解説されているのみであり、書記やファシリテーターがどのように事例提供者や参加者をサポートしているのか言語化されている論文や本は見受けられない。村山・中田（2012）では、書記の書き方について原則は書記の人に任せ、細かい書き方の規則はつくりないと述べており、

筆者も原則は書記を担当した人に任せ、規則を作る必要はないと考えている。一方で、初めてPCAGIP法に参加し書記を担当する人にとっては具体的な方法を一例として伝えた方が書きやすい場合も実際の場面では遭遇する。そこで今回は、PCAGIP法に参加した参加者の書記に関する感想をKJ法にて分析し、書記の役割について検討することに加え、筆者のこれまで実践の中で書記を担当する際の具体的な工夫についても言語化することで、PCAGIP体験を支える書記の実践例の一つとして紹介したいと思う。最後に書記という役割から検討されたPCAGIP法の研究における今後の課題を述べる。

2. 書記の役割

PCAGIP法は、事例提供者、ファシリテーター、書記、参加者というメンバーで構成されている。またPCAGIP法には、①批判しない、②メモを取らない、③質問はひとり一つまで、というルールが存在する。そのため、今回のテーマである書記がPCAGIP法でやり取りされた情報を参加者全員の代わりに記録を取るという役割を担っている。参加者が個人でメモした情報を基に検討するのではなく、書記によって可視化された情報を参加者全員で眺めて検討することは、同じテーマを共有するコミュニティ体験になるため(村山・中田, 2012)、PCAGIPの雰囲気づくりに影響する重要な役割でもある。

3. 参加者の書記に関する感想

3-1. 対象と手続き

PCAGIP法の参加者が書記に対してどのような感想や疑問を抱いているのか把握するため、これまで筆者が心理職や教員など計61名を対象にPCAGIP法を実践した際のアンケートから、書記に関する感想が述べられていた部分を抽出した。アンケートの質問は「PCAGIPに参加して良かったところはどんなところでした

か?」という内容であった。書記に関して感想を述べていたのは、61人中11名であった。感想は、KJ法(川喜田, 1989)を用いて分析した。11名分の抽出された書記に関する感想をラベルとし、11枚のラベルを基に表札を作成した。

3-2. 結果と考察

KJ法を用いて分析した結果、11枚のラベルは、A:情報が可視化されることに関する感想とB:書記の方法論に関する感想の2つの表札に分けられた。Aの表札は5枚のラベルから構成され、Bの表札は6枚のラベルから構成された。

Aの表札から、情報が可視化されることで分かりやすかったという感想が多数みられ、事例提供者を理解していくために、情報を可視化するという書記の役割はPCAGIPの進行において重要な役割であると改めて言えるだろう。また、[A3]「悩みが目に見える形で可視化、具体化されていくのを感じられた点良かった」という感想において、「具体化されていく」という体験が進行している表現が用いられていることから、書記がやり取りを記録していくことによって、参加者には可視化された情報を見るという体験と、情報が可視化されていくのを見るという2つの体験が生まれていると推察される。加えて、[A1]「ホワイトボードという目の前で話をまとめてもらったのが非常に分かりやすかった」という感想も見られたことから、資料を配布するなど、事前に整理された情報を読むのではなく、書記が目の前で情報まとめていくことで、次第に事例提供者の悩みが可視化されていくプロセスを参加者が体験することが事例提供者を理解していく上で非常に重要なプロセスであると言えるだろう。つまり、書記が記録していくことは、単にやり取りされた情報を可視化するだけでなく、次第に情報が整理されていくプロセスも可視化していくという重要な役割も担っていると考えられる。

Bの表札からは、具体的な書記の工夫について知りたいという感想と実際に筆者が工夫して

<p>A:情報が可視化されることに関する感想</p>	<p>[A1]ホワイトボードという目の前で話しをまとめてもらったのが非常に分かりやすかったです</p> <p>[A2]視覚的に情報が整理されるのが毎度分かりやすいなど思います</p> <p>[A3]悩みが目に見える形で可視化、具体化されていくのを感じられた点良かった</p> <p>[A4]文字化することもいいなと思いました</p> <p>[A5]メモを取らないので、メモに必死になることがなく、話を聞き逃すことがなかった</p>
<p>B:書記の方法論に関する感想</p>	<p>[B1]どういう風に書記すれば、事例提供者の役に立つか？</p> <p>[B2]書記の工夫が必要ですね、きれいにまとめるのは難しそうです</p> <p>[B3]書記のやり方を知りたい</p> <p>[B4]質問と答えを色分けしてくれたのは見やすかったです</p> <p>[B5]書記を2人ですると、聞き逃しても聞いて確認できる相手がいる安心感が、書記のハードルを下げるなど思いつつ、初対面同士だとやや気を遣うなど思ったり、でも私としてはやりやすかったです</p> <p>[B6]他の人の書記を見るのも参考になって面白かったです</p>

図1 KJ法の結果

いる書記の方法に関する感想が述べられていた。中でも、[B1]「どういう風に書記すれば、事例提供者の役に立つか？」という感想が見られたように、単に書記が情報をまとめていくだけでなく、事例提供者の役に立つという視点から書記を担当する姿勢が重要だとある参加者は感じたようである。書記の心構えとして、事例提供者の役に立つように記録しようという姿勢を持つことは、書記もメンバーの一人として事例提供者を大切に作る雰囲気づくりに貢献できると考えられる。また [B2]「書記の工夫が必要ですね、きれいにまとめるのは難しそうです」という感想や [B3]「書記のやり方を知りたい」という具体的な書記の方法論を知りたいという要望が見られた。書記が記録をしていくにあたって、村山・中田（2012）では、書記の取り方

については書記の人がやりやすいように書いてもらい、最終的にピカ支援ネット図をつくろうと意図するとまとまりやすくと述べられている。質問と回答を繰り返していくなかで、ピカ支援ネット図と呼ばれる、クライアントを中心とした資源や支援者のネットワークを可視化していくことで、事例における事例提供者が担う役割を明確化するという目的を念頭に置いているようである。資源を可視化していくという点もPCAGIP法で事例提供者がヒントを見出しにくいうえで重要ではあるが、ピカ支援ネット図にまとめようとするのではなく、事例提供者の発言をそのまま記録していくことで、事例提供者の悩みや事例提供者なりの感覚を可視化していくことも事例提供者がヒントを見出しにくいうえで有用になることもある。筆者はあまりピカ

支援ネット図を意図して書記を担当していないが、事例提供者にとってヒントが見出されるPCAGIP体験が生まれている。つまり、PCAGIP法の書記の目的や方法は、事例提供者がそのPCAGIP法において事例をどのように考えたいのかという意向によって変化すると推察される。そのため、書記の記録の取り方について決まったルールを設けるよりも、書記の取り方に関して様々な方法を知り、多様な選択肢があることが事例提供者にとって役に立つPCAGIP法を支える書記として貢献できると考えられる。加えて、[B4][B5][B6]のような筆者の書記の工夫に関する感想も見られたことから、筆者の書記の工夫の中で好評だった方法を紹介し、今後書記を担当する人の選択肢の一つとして活用してもらえればと思う。

4. 具体的な書記の実践例の紹介

筆者は書記を担当する際に、事例提供者の意向を確認しながら記録していくことに加え、書記も事例提供者を理解していくメンバーの一人として安全な雰囲気づくりに貢献することも意識して以下のような実践を行っている。

①書記の選び方

書記は事例提供者と同じく、書記の役割を希望した人に担当してもらうようにしている。自発的に希望した人に書記を担当してもらうことで、ただ発言を記録するという受け身ではなく、事例提供者にとって役立つような書記を心がけようとする能動的な姿勢が生まれ、事例提供者を大切にしようとする雰囲気づくりにつながることが多い。また書記という役割を参加者の中から募集することは、参加者の希望する参加スタイルを選択する機会を作ることになり、参加者それぞれの自発性を活かした場を構成していく一つの要素になると考えられる。

②ホワイトボードの使い方

ホワイトボードに記入していく際に、どの位置にどの情報を書くか意識してまとめていくことで、情報がカテゴライズされ、のちに事例提供者や参加者が振り返る際に視覚的に理解しやすくなる。そのため、中央に事例提供者の問題意識や検討したい内容を書き、左に事例の概要に関する内容を、右に具体的な支援内容を、中央の下に事例提供者とIP(Identified Patient)の関係について、そして似た情報は近くに書くという風に、書く位置を分けていく事で情報をカテゴライズすることができる(図2)。カテゴライズしながら記録していくことで、質問が1周した後に、ホワイトボードを見ると、どのような話題がどのくらいやり取りされたのか、という話題の質と量が一目で分かりやすくなる。

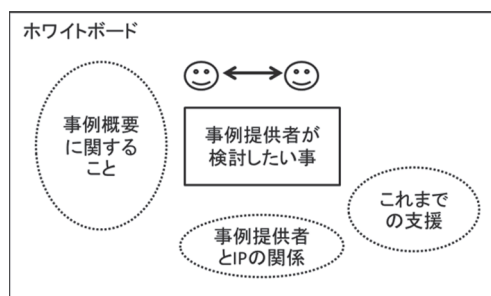


図2 ホワイトボードの使い方の例

③ホワイトボードへの書き方

参加者の感想にもあったように、ホワイトボードに記録していく際に、事例提供者と参加者の回答はマーカーの色を分けて記入していく方法は好評である。例えば、参加者の質問は青色、事例提供者の回答は黒色、その他途中で事例提供者が話していくうちに気がついて発言した内容は赤色、など色を区別して記入していくことで、振り返る際に誰がどのような発言をしたのか分かりやすい。また記入していく際に、言葉のみで記録することにこだわらず、図での表現や、絵の得意な人が書記を担当した際には絵で表現してもらおうと、事例提供者の言葉では表現

しきれない感覚が共有されることもあった。

④書記を二人で担当する場合

書記を二人で担当する場合には、1回の参加者の質問と事例提供者の回答を一人の書記が担当し、次の参加者の質問と事例提供者の回答はもう一人の書記が担当するというように、交互に質問と回答を記入していくと、テンポよく質問と回答の流れを遮らずに記録していくことができることが多い。質問の内容や、ホワイトボードの位置で担当を分けるなどの方法も試してみたが、参加者によってどのような質問がでるかまばらであるため、順番に記入していくと書記同士がスムーズに共同作業しやすいことが多かった。

⑤どのように内容をまとめるか迷った場合

事例提供者と参加者の回答をホワイトボードに記録していく際に、どこに、どの情報をどのくらいまとめていくかという点に関して書記自身の感覚に任されている。全ての発言を記録する事は困難であり、書記が要点を絞って記入していくからこそ、その後振り返る際にわかりやすく、有用な情報となる。特に事例提供者が自身の考えや感覚について言語化している時は、事例提供者の内省が深まっており、その言葉が糸口となり事例提供者にとってヒントが見出されていく場合が多いため、PCAGIPの中でも重要なポイントである。一方で、このようなポイントは、書記にとってはどのようにまとめるのか迷う最大のポイントでもあり、内容をうまくまとめようとして要約しすぎる場合がある。例えば、事例提供者が「〇〇だとわかっているんですけど…」などと発言した際に、書記が“事例提供者の葛藤”などという言葉でまとめてしまうと、事例提供者の言葉になりきれない感覚が抜け落ちてしまう。そのため、できるだけ事例提供者の発言は言い換えず、そのまま“〇〇だとわかっているけど…”などと記録をしたり、絵に描いたり、事例提供者にどのように記録し

ておくと良いか質問することで、事例提供者の言葉になりきれない感覚をそのまま残しておくことが有用な場合が多かった。そのまま事例提供者の言葉を残すように意識することで、ただ情報を羅列した記録にするのではなく、事例提供者の感覚を可視化する事にもつながるようである。

その他、書記を担当して戸惑う場面として、質問と回答のスピードが速く、書記が間に合わない場合がある。特に1周目は概要に関する質問になりやすく、参加者と事例提供者の間でテンポよく質問がやりとりされることが多いが、書記にとっては、始まったばかりで記録していく事に慣れていないため、時間を要してしまうことがある。そのような場合は、ファシリテーターに少し待ってもらうように伝えることが、メンバー全体にとっても良い場合がある。テンポよく進み過ぎている際には、書記が書き終えるのを待つ間が、事例提供者や参加者にとってはゆっくり質問や回答を考える間にもなり、自然とゆっくりと振り返りながら進行する雰囲気につながると考えられる。

5. 今後の課題

今回、書記という役割に着目し、PCAGIP 研究において大きく二つの課題が見出された。一つ目は、可視化された情報を理解するという観点である。参加者の感想を分析した結果、書記が参加者の目の前で情報を可視化していくというプロセスは、参加者が事例提供者を理解していくうえで重要なプロセスであることが考察された。つまり、情報を可視化していくということが、PCAGIP 法の良さを引き出す上で重要な側面を担っている可能性を示唆しているとも推察される。今後、PCAGIP 法の独自性や効果を検討していくにあたり、情報が可視化されるといった体験についてさらに検討し、事例提供者の視点からも研究していく必要があるだろう。二つ目は、書記の在り方や方法論の明示という観

点である。今回、書記の方法論に関して一つの例として筆者の実践を紹介したが、パーソン・センタード・アプローチの理念を基盤としないメンバーでPCAGIP法を実践する場合、書記の在り方をその場のメンバーや事例提供者の意向のみに任せることで、事例提供者がヒントを見出すPCAGIP体験が生まれるのだろうか。PCAGIP法における書記の在り方や方法論を明示していくことについては、今後さらに議論の余地があるだろう。

文献

川喜田二郎(1986) KJ法—渾沌をして語らしめる

—, 三晃印刷.

村山正治・中田行重(編)(2012). 新しい事例検討法 PCAGIP 入門—パーソン・センタード・アプローチの視点から—, 創元社.

並木崇浩・小野真由子(2016). PCAGIP 法研究の動向と課題, 関西大学心理臨床センター紀要, 7, 91-100.

Rogers, C.R. (1951). Client-centered therapy; its current practice, implications, and theory. Oxford, England : Houghton Mifflin. 保坂亨・諸富祥彦・末武康弘(訳)(2005) クライアント中心療法—ロジャース主要著作集2—, 岩崎学術出版.